



2021.1.1 No.110 (季刊)

編集 国立ハンセン病資料館
発行 公益財団法人笹川保健財団

目次

- P1 謹賀新年 本年も資料館をよろしくお願い申し上げます
P2 常設展示室のメンテナンスを実施
P2 TBSラジオ記者・崎山敏也さん講演会

- P3 資料紹介 その⑦『呼子鳥』
P3 研究から 山本暁雨の人と書
P4 資料館の現場から その⑮ 管理部の仕事
P4 お知らせ／利用案内

謹賀新年 本年も資料館をよろしくお願い申し上げます

昨年は新型コロナウイルス感染症の影響により、臨時休館、再開館後の徹底した消毒、完全予約制などの利用制限を実施いたしました。東京オリンピック・パラリンピックに合わせて立案した企画展の開催は延期、展示解説や夏期セミナー、上映会などの対面で行う催しもすべて見送らざるを得ず、皆様には大変なご不便をおかけしました。

そうしたなかでも、ハンセン病問題に関する啓発を一步でも前に進めようと、スタッフ一同行動で取り組みました。現在ではWeb通信アプリを使ったイベントや外部講演、団体対応プログラムなど、複数のオンライン事業を実施しています。また会期の変更と入場人数制限のうえ開催した石井正則写真展「13（サーティーン）～ハンセン病療養所の現在を撮る～」には、連日予約いっぱいご来館いただき、YouTubeからライブ配信した石井正則さんのトークイベントにも計450人以上のご参加を得ました。12月にはオンラインでの「ハンセン病と人権セミナー」を開催し、ご好評をいただいております。

また資料整理やメンテナンスなどの業務についても集中的に進めています。常設展示のグラフィックパネルは懸案であった誤記修正を行い、ほかに経年劣化が激しかった展示室内の床面などの修繕工事も

行いました。

そしてより根本的に展示のありかたを検討する場として、昨年11月には厚生労働省健康局長の諮問会議である第1回国立ハンセン病資料館常設展示見直し検討会が開催されました。本年も活発なご議論をいただき、よりよい展示を製作すべく努力してまいります。

コロナ禍は、私たちがハンセン病問題から得た教訓を、自らの課題として今の時代に活かしているかを厳しく問うています（本紙第106号のメッセージをご覧ください）。当館を、ハンセン病回復者やその家族の思いに耳を傾け、ハンセン病対策の誤りから学び、そして未来に向けて私たちができることを共に考える起点とすべく、本年もご支援をどうかよろしくお願いいたします。

成田稔（館長）



常設展示室の メンテナンスを実施

当館では常設展示室のメンテナンスを行っています。対象の箇所は、①化学療法以前の療養所における入所者の生活を再現した「山吹舎ジオラマ」の人形8体、②人形が身に着けている実物の着物のクリーニング、③壁面展示のシートの張り替えです。

ジオラマの人形は、腕ががっちりと固められているため、いちど博物館の展示模型などを手掛ける会社の工場に運び出し、腕を切断して着物を脱がせてもらいました。着物のクリーニングも専門の職人さんに行ってもらいました。作業は2回に分けて実施し、ジオラマ内に4体しかいない状況が続きましたが、1月中には全員が揃い、当時の寮舎の状況をご覧いただけます。

壁面展示は、これまでに判明していた誤記や表記ゆれなどを修正するとともに、一部を見やすいレイアウトに変更しました。また2019年6月のハンセン病家族訴訟の判決や、同11月の家族補償法の制定などを新たな動きとして展示に盛り込んでいます。さらに新たな工夫として、壁面シートを白色・不透明のものに変更し、以前のものに比べて格段に写真や文字が見やすくなりました。

1月中旬には、メンテナンスを終えた展示をご覧いただけます。今後もハンセン病問題を正しく理解できる展示室を維持するため、さまざまな整備を進めていく予定です。

(橋本彩香)



メンテナンスのために工場に運ばれた人形

TBSラジオ記者・崎山敏也さん 講演会



11月28日(土)、崎山敏也さん(TBSラジオ記者)のご講演をYouTubeでライブ配信しました。ハンセン病問題に関わりをもつ様々な職業の方を講師にお招きする「職業シリーズ」の5回目です。

崎山さんがハンセン病問題に関心をもったきっかけは、学生時代に読んだ『昭和二十年 東京地図』という本でした。このなかで多磨全生園が紹介されていて、「場所の記憶」という指摘にふれ、現場に足を運ぶべきであると考えたそうです。

崎山さんは、ご自身が取材した音源をはじめとしたTBSラジオが所蔵するハンセン病問題を取り上げた番組の貴重な音源(古いものは1952年のもの)を紹介してくださいました。そして、ご自身のお仕事を省みながら、戦後におけるメディアによるハンセン病問題の取り上げ方の歴史と問題点を分かりやすく整理してくださいました。また、ご自身の経験から、顔が映らないラジオだから取材でき伝わりやすいケースがあるとも指摘されました。

崎山さんが最後に指摘されたことは、ハンセン病問題の普及啓発を考えるうえで示唆に富むものだと思います。すなわち、自分はラジオ記者としてハンセン病問題の取材をつづけ現場の声を伝えてきたが、「伝える」という作業は記者でなくてもできる。それぞれの人がそれぞれの立場で、自分のできる範囲で伝えることが大切である、と。崎山さんをご自身が取材してその声を伝えた、多磨全生園の自然探索イベントに参加した子どもたちが将来その子なりの方法で記憶を伝えていくであろうことを信じています。そして、その営みの先に社会が良い方向に変わっていくであろうことも。

崎山さんのご講演は、YouTubeのハンセン病資料館チャンネルでご覧いただけます。(大高俊一郎)

資料紹介 その⑦

『呼子鳥』

今回紹介する資料『呼子鳥』^{よぶこどり}（山桜出版部・全生学園）は、全生病院（現在の国立療養所多磨全生園）内の児童文芸誌です。1934（昭和9）年4月発行の創刊号は『呼小鳥』と表記されており、創刊にあたり全生病院長であった林芳信は「この小誌『呼小鳥』の小鳥になるものは申すまでもなく、暖かき父母の懷を離れ、親しき兄妹の許を去つて本院に療養して居る薄幸なる子供達である。本院の預つて居る可愛い少年達である。」と記しています。また、全生学園の鈴木生は「『歌へ呼べ』小鳥の如く清らかに、美しく、純真に。『呼小鳥』はかうした使命に依つて生れたのであります。」と発刊に際して文を寄せています。

そのような願いがこめられた『呼子鳥』で紹介されている入所児童の作文、自由詩、童謡、俳句、短歌などには、故郷や家族への切ない思い、病のこと、季節や自然も感性豊かに表現されており、あたかも小鳥の囀りのように、心に呼びかけ響いてきます。

入所児童の作品だけでなく、『呼子鳥』には、全生病院関係者、患者教師、選者らも寄稿しています。全生病院で療養生活を送っていた北條民雄は代表作『いのちの初夜』を発表した2年前の1934年、『呼子鳥』第3号に秩父晃一の筆名で童話「可愛いポール」を発表しています。

当館では、その童話を基に絵本『かわいいポール』（絵・おぼまこと）を2016年に刊行しました。活版印刷の『呼子鳥』のなかの「可愛いポール」、そして明るい温かな絵で描かれた『かわいいポール』。印象は違いますが、心やさしい女の子と子犬ポールの物語は、院内の“小鳥たち”のために描いた北條の思いを時を越えて伝えてくれます。（坂井直枝）



研究から

山本暁雨の人と書



山本暁雨（1955年頃）

「悴（かじか）みし手に執念の筆握り」これは山本暁雨^{やまもとぎょうう}（本名・熊一）によって晩年に詠まれた句です。1899年に生まれ、16才の時に父親と共に全生病院（現多磨全生園）に入所した少年は、1973年に亡くなるまでの約60年間、この療養所の中で人生を送り

ました。

山本は、戦前、全生病院で歌舞伎役者、書の世界で活躍しました。現在、当館には山本の書作品が9点残されており、10月に開催したミュージアムトークでは、それらの作品や俳句、歌舞伎役者としての活動を追うことで、戦前の文化活動の意味についてお話ししました。

入所まもない17才の時に山本は患者歌舞伎の役者として舞台に立ちました。娯楽がほとんどない療養所内で患者達に許されたわずかな楽しみの一つであると同時に、役者たちは他の患者にとってあこがれの的でもありました。また、療養所ですでに大正時代から俳句活動を始めとする文芸活動が盛んでした。それはたとえ不自由な体であっても取り組めたため、多くの人を取り込んだのです。

さらに、晩年に取り組んだ書からは、山本の美的表現に対する山本の探求心とこだわりを垣間見ることができました。山本は、俳句や歌舞伎、書に情熱を燃やし、生き抜きました。隔離されている中で、療養所を生き抜くためには「生きがい」が何よりも重要だったのだと考えられます。指が曲がった「悴みし手」で「執念」の筆を挟み込んで書く。まるで合掌しているような山本のその姿は、晩年に至るまで「生きがい」としての書への情熱が消えなかった姿勢を鮮明に刻みつけます。（金貴粉）

資料館の現場から その⑮

管理部の仕事

管理部管理課の仕事は、総務、人事、経理などいわゆるバックオフィス業務全般で、多岐にわたっています。

ご来館いただいたお客様が快適にご見学いただけるよう、受付スタッフの調整から、館内清掃や施設設備の修理依頼、また展示解説や各事業を実施する学芸員の雇用、また学芸員も支障なく業務を遂行できるよう、事務所環境の整備や、学芸員の労務管理、そして電気代・水道代などに至るさまざまな支払い業務も行っています。

加えて、所管である厚生労働省との連絡調整、資料館内ならびに管理運営団体における稟議決裁手続きなども担い、日々資料館が円滑に、問題なく運営されている状態を作ることが求められています。

さらに、広報業務も担当しています。ご存じの通り、資料館もFacebookやTwitterの公式アカウントを開設し、最新情報をいち早く皆さまにお届けすることをめざしています。その他にもプレスリリースの発信、メディア各社からの問い合わせにも対応しています。

また、厚生労働省からの受託事業として、ハンセン病問題に関するシンポジウムの開催、『ふれあい文芸』の作成、啓発リーフレットの作成なども担当しています。

当資料館の運営において、何かお気づきの点などございましたら、ご遠慮なく管理部管理課までお知らせいただけましたら幸いです。(芳川龍郎)



本年度管理課に新たに配属された及川由紀子(左)と千代倉裕子(右)、中央は飯塚賢治事務局長

お知らせ

■ギャラリー展

「コロナ時代 ハンセン病回復者からのメッセージ」(仮)

会 期：2021年1月30日(土)
～2月23日(祝・火)

会 場：当館ギャラリー

■企画展

「『青い芽』の版画展——多磨全生園の中学生が彫った“日常”」(仮)

会 期：2021年3月2日(火)
～4月29日(祝・木)

会 場：当館企画展示室

■その他イベントにつきましては、当館HPまたは公式Twitter、Facebookをご覧ください！



当館HP

※ご利用の際は下記の利用案内をご覧ください

利用案内

新型コロナウイルス感染拡大防止をはかるため、入館制限や予約制の導入などを行っています。詳しくは当館公式ホームページをご覧ください。

■開館時間 10:00～11:30
13:30～15:00

■休 館 日 毎週月曜日(祝日の場合は開館)
年末年始、国民の祝日の翌日、
館内整理日

■入 館 無料(要事前予約)

■交 通

- ・西武池袋線 清瀬駅南口より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
(「ハンセン病資料館」下車)
- ・西武新宿線 久米川駅北口より
西武バス「清瀬駅南口」行バスで約20分
(「ハンセン病資料館」下車)
- ・J R 武蔵野線 新秋津駅より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
(「全生園前」下車、徒歩10分)
または徒歩約20分

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13
TEL 042-396-2909 FAX 042-396-2981
URL <http://www.hansen-dis.jp>